

## 節句の昔蒲のいわれ

ざっとむかし、すこいお屋敷に、年のころ十六、七のめんこい娘が住んでいたんだと。

すこくでっかいお屋敷で、離れには女中や小間使いを住まわせていたんだと。

この娘のところに、それはそれはめんこいはかまをはいた若衆が、遠くから「カラコロ、カラコロ」と高下駄の音をならして、毎日毎日通っていたんだと。

夜も遅くなると、また「カラコロ、カラコロ」と高下駄をならして、どこともなく帰っていったんだと。

若衆が、どこから来て、どこに帰んのかもわかんねかったんだと。どこのだれが聞いても何にも教えねえので、だれだかひとつもわかんねかったんだと。

そのうちに娘は、若衆をうんと好きになって「嫁さまになつちえ」ってゆうようになったんだと。

素姓がまったくわかんねえでは、所帯はもたせらんないで、若衆に「なんていうんだい。どこに住んでいんだい」

って聞いたんだと。

若衆は、だまってばかりで、やっぱりなんにもおしえねえんだと。なんぼ聞いても同じなんだと。

それでも、娘はやっぱり思いはつのるばかりだったんだと。

しかたねえから、若衆が帰るとき、わかんねように小間使いにあとをつかせたんだと。

小間使いは、ちようちんもつけねえで、くらい夜道をそとつけていったんだと。つけらうちいんのもわかんねで、若衆はどんどん山に入っていたんだと。

山に入って、半道ぐらいすぎたところで若衆はつしろをふりかえったんだと。小間使いはこしも抜けるほどたまげたんだと。なんと、若衆は「へび」だったんだと。

いそいそお屋敷にげかえって、ご主人に知らせたんだと。

話を聞いてたまげたご主人は、「わけのぐるわにしょうぶをさして、しょうぶ湯にいればへびもはいてこれめえ」って、娘をしょうぶ湯に入れたんだと。

その時に、娘はへびの子供を身ごもっていたから、しょ